

受付番号

留学・研究計画書

氏名 <p style="text-align: center;">伊東 未来</p>	留学機関名 <p style="text-align: center;">大阪大学大学院人間科学研究科</p>
留学先国名 <p style="text-align: center;">マリ共和国</p>	留学期間 西暦 2009 年 4 月 ~ 2010 年 3 月
研究テーマ <p style="text-align: center;">マリ共和国ジェンネにおける社会集団とアソシアシオンの可能性についての研究</p>	
研究テーマの説明 <p style="text-align: center;">(テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)</p>	
<p>西アフリカ・マリ共和国のジェンネ市は、14 世紀前後から 20 世紀にかけて、サハラ砂漠の南北をつなぐ交易の中心地として、またイスラーム学術都市として栄えた。稲作、漁業、牧畜、商業など生業を異にする 10 を超える民族集団が共存する町である。ジェンネでは、複数の民族集団を超えて地区ごとに組まれるマルチエスニックな年齢集団(チェレテレイ)や、諸民族集団のそれぞれの社会集団を統括する上位の意思決定の場(マラド)など、多層的な社会組織の制度が培われてきた。それは、1km² に満たない土地に 10 以上の民族が生業を異にしながらか共存するなかで編み出され、諸大帝国や諸外国の支配の影響を受けながら変化してきた、ジェンネに特有の多層的で豊かな社会制度である。しかし、1960 年代後半から相次いで起こった干ばつの影響で住民の生業は大きく停滞し、仕事をもとめて都市部や外国に流出する人びとが増加した。人口の流出と厳しい経済的困窮は、それまで政治的意思決定や諸問題の仲裁、祭りや儀礼の実行などをおこなう基盤であった社会集団を弱体化させ、共同体の機能は低下していった。</p> <p>本研究では、こういった経済的困窮や共同体の危機を、年齢集団・職業集団・カースト集団の再構築やアソシエーション(アソシアシオン)の結成によって乗り越えようとしている、ジェンネの人びとの実践を調査・研究する。これらの実践は、社会集団の弱体化によって住民間や住民と外部(支援団体や行政機関)の間にこれまで起きなかった問題が生じるようになったことに対応するなかで、1970 年代にはじまった。また、アソシエーションの結成数はマリ共和国の民主化以降の 1990 年代初頭から急増し、2007 年現在ジェンネに 80 以上存在する。これらのアソシエーションは既婚女性を中心とした組織であり、共同出資で小規模な商いや農業をおこなうほか、NGO に地域の要望や支援計画を提案するなど、外部支援団体との交渉媒体にもなっている。また祭りや結婚式、行政との交渉などでは、アソシエーションと年齢集団の協働もみられ、両者はさまざまなレベルで、議論・意見交換のための「公の場」を創造している。ここ 20 年あまりで普及したアソシエーションと「町の成立以前からある」といわれる社会集団は、いずれも住民の社会生活、経済活動のなかで重要な位置を占めている。</p> <p>近年、開発人類学や政治人類学のなかで、「下からの政治的・社会的活動主体としてたちあられ外部に開かれたもの」としてアソシエーションの可能性を描くものは多いが、ジェンネでは社会集団・アソシエーションともに、住民の生活には欠かせない社会制度の一部をなしている。本研究は、社会集団とアソシエーションがそれぞれに変化しながら相補的に活動しているジェンネの事例を調査・分析することで、一方の存在だけでは成立し得ないような関係性や共同体の在り方を提示し、これらの可能性を検討する。</p>	

成果報告書

記入日 2010 年 2 月 22 日

氏名 伊東未来	留学先国名 マリ共和国	所属機関 国立人文科学研究所
研究テーマ：マリ共和国ジェンネにおける社会集団とアソシアシオンの可能性についての研究		
留学期間：2009年2月～2010年2月		
<p>留学期間中は、首都の国立人文科学研究所で研究指導を受けながら、モプチ州のジェンネ市でフィールドワークをおこなった。</p> <p>留学期間中に受けた研究指導</p> <p>おもに、以下の3人のマリ人研究者から、研究・調査にかんする助言と指導を受けた。マリの国立人文科学研究所副所長であるママディ・ダンベレ博士（マリの考古学、歴史学）、マリ大学の社会民族学者ブレヒマ・カッシボ博士（マリの漁民社会の民族学）、マリ文化省文化財保護部ジェンネ支局長のヤムサ・ファネ氏（マリの歴史学）。ダンベレ先生からは、調査対象地であるジェンネをふくむニジェール河内陸三角州全体の歴史について教授を受けた。また、ジェンネの人口の約15%をしめる漁撈民ボゾの社会組織や漁法、宗教観念などについて、専門家であるカッシボ先生から助言を受けた。在ジェンネの文化財保護局局長であるファネ氏からは、ジェンネにおける社会組織の発展へのイスラームの影響について、指導をうけた。</p> <p>月に一度、調査地ジェンネから首都に移動し、3日～1週間ほど滞在、人文科学研究所で上記のような指導を受けた。（5月と9月はジェンネでの調査多忙と先生方の外国出張につき、随時メールや電話にて調査報告）。</p> <p>調査項目</p> <p>留学期間中はおもに、1）ジェンネ市とその後背地（ジェンネからおよ80km圏内の8の村）における社会組織の調査、2）社会組織の変遷と活動におおきな影響をあたえる、それぞれの生業についての調査をおこなった。</p> <p>○ジェンネ市の社会組織にかんする調査</p> <p>ジェンネ市の面積は約70haで、ニジェール河が増水する季節には、四方を水に囲まれる。ジェンネの住民約1万4000人（推定、2009年現在）は、10以上の異なるエスニック・グループ（ソングアイ、フルベボゾ、バマナン、ソニンケ、ドゴンなど）からなっている。およそ800年にもわたって、この限られた土地に言語・生業を異にする複数のエスニック・グループが共生しえたのはなぜか。また、1960年の国家独立後の経済的不安定や70年代以降の干ばつなどの危機的状況を、いかにしてマネージしてきたのか。本研究では、こうしたエスニック・グループの共存の技、不可避的な経済や気候の危機を乗り越える技ととらえ、縦横に発達した社会組織に着目し、調査をおこなった。</p>		

まず、2月から5月にかけて、ジェンネの民族ごとの社会組織を調査した。ジェンネには11の地区があり、それぞれに主要なエスニック・グループの集住が見られるものの、どの地区にも複数のエスニック・グループの人びとが居住している。まず、全地区の伝統的地区長（祭祀などを執りおこなう世襲の地区長）と行政的地区長（フランス植民地支配以降に設置された住民と役所の仲介や税金のとりまとめなどをおこなう地区長）を訪ね、それぞれに地区の社会組織や歴史的経緯について、それぞれ複数回インタビューをおこなった。各地区の社会組織は、地区ごとに主要なエスニック・グループによっていくつかの違いは見られるものの、原則として、*ton*と呼ばれる寄り合い組織があり、そのなかにさらに、前後3,4才ていどの年齢層（男女別）で組まれた階梯集団がある、という成り立ちである。月1回ていどの話し合いのほかに、祭りのさいの話し合い、*foroba·goy*（協同労働）と呼ばれる町の美化や農繁期の作業分担のための話し合いなど不定期の会合が開かれている。インタビューでこの全体像についてたずねるとともに実際の *ton* の場で参与観察をおこなった。とくにジェンネの住民にとって最大の祭祀のひとつである、住民参加のモスクの化粧直しに向けての *ton* では、各地区の *ton* の特色や階梯集団のそれぞれの役割分担、これらの町全体での連携、ライバル関係などが顕著に発露しており、集中的に調査をおこなった。

おもに生業ごとに組まれている職業集団についても調査をおこなった。この調査は、いずれの生業も比較的休閑期の3月からはじめ、随時、10月までおこなった。農業、漁業、牧畜、泥大工、手工業（金銀細工、機織、鍛冶屋）、コーラン学校の教師などの職業集団について、それぞれの代表者や年長者、比較的若い世代の人びとにそれぞれインタビューをおこない、その活動について調査した。組織によって起源や組織は異なるが、それぞれに、集団内のメンバーのみで保持されている職業にかんする「秘密」の共有・伝達が見られる。こうした「秘密」の共有や、それぞれの生業において主要なエスニック・グループの言語が会合における共通言語になっているなど、公共の場を形成している地区ごとの *ton* とは異なる側面が多く見られた。職業集団は、干ばつ以後の第一次産業を中心とした経済的に厳しい状況で、外部（首都や外国）の支援団体の援助を求める基盤にもなっている。こうしたここ30年の職業集団の変遷についても、聞き取り調査をおこなった。

また、マリ政府が民主化した1990年代以降に活発になった、相互扶助組織（アソシアシオン）についても、調査をおこなった。地区ごとの社会集団や所行集団の起源が「町の成立と同時」＝数百年前から、と語られることが多く、成員も男性が中心なのをたいし、ここ10年で結成されアソシアシオンは女性が中心である。活動内容も、菜園の運営や講の運営など、その主たる目標を経済的な困難の解決に設定したものが多し。ジェンネ内40のアソシアシオンの代表者に、その活動内容について聞き取りとアンケート調査をおこない、男性を中心とした生業の困難をアソシアシオンがいかなるかたちでカバーしてきたのかを明らかにしようとした。また、これらの「新しい」アソシアシオンが、複数の社会組織をかかえるジェンネの町にいかなる影響を与えているのかについても、町のそれぞれの世代、性別、エスニック・グループの人びとにインタビューをおこなった。

○ジェンネの後背地における社会組織の調査

10月以降はおもに、ジェンネ市の周辺の村落で社会組織にかんする調査をおこなった。周辺の村落では、ジェンネと異なり、ひとつの村に2,3のエスニック・グループが共住しているていどである。それぞれに農民、牧畜民、漁民を中心とした全8つの村に滞在し、各1,2週間の調査をおこなった。これは、ジェンネの

社会組織が都特有の社会組織であるのか、特色があるのならばそれはいかなるものなのかを知る比較のため、また、村落部とジェンネのエスニック・グループのかかわり（町村の境を越えたグループ内の内婚、土地所有の関係など）を明らかにするためであった。

今後は、本留学でえられたフィールド・データと研究機関での研究をもとに、ジェンネの社会組織にかんする博士論文の執筆にとりかかる予定である。

留学期間中の写真



調査地ジェンネの長屋のお隣さんと。



年に一度のモスクの塗り直し祭り。町民総出で、町で唯一のモスクの泥しっくいを塗り直す。

留学全般についての感想

松下国際財団の留学助成によって、たいへん有意義な留学期間を過ごすことができました。これまでも約1年間、マリ共和国で研究調査をおこなってきましたが、ごくごく限られた自費での調査では、調査の範囲や現地の人との調査協力に制約があり、はがゆい思いをいたしました。今回は、じゅうぶんな留学助成をいただいて、首都での研究や文献調査、調査地でのフィールドワークを、のびのびとおこなうことができました。日本に比べてはるかに物価の安いマリ共和国ですが、わたしが最初に調査をおこなったときには、その手持ちの資金の少なさから細々と生活していたため、近所の人びとに、「お金持ちの国・日本から来たのに、おどろくほど慥気だ」と、親しみをもってからかわれていました。もちろん今回の留学期間中も必要以上の贅沢はしなかったため「慥気な日本人」というわたしへの評価は変わらなかったようですが、安い現地の手づくり石けんを好んで使い、食べ物は住民とまったく同じものを喜んで食べるわたしを見て、たくさんの町の人が「慥気だが、『チュバブ』（“白人”の意）ぶらず、ここで生まれた安いものを好んで、しっかり仕事にはげんでいるのはとてもよいことだ」と評価してくれたのは、人類学者のたまごにとって、とてもうれしいことでした。

留学機関では、さまざまな専門家から助言をいただきました。マリではまだまだ、国内の統計データや諸分野の研究成果の保存が整備されているとはいいがたく、「国立人文学研究所の留学生」という身分なしには入手が難しかったであろう貴重な資料なども、閲覧・活用させていただくことができました。

留学中の所属機関である人文科学研究所は首都バマコにあり、調査地ジェンネは首都からバスで13時間ほどの距離にあります。中心的に居を定めているジェンネから研究機関のあるバマコへは、だいたい月に一度往復をしました。もっとも暑い季節には車内が50度近くなるバスでの月一往復の移動はこたえましたし、地方の静かな古都であるジェンネから、成長著しい、煙たくてカラフルな首都に出て行くと毎回めまいをおぼえました。しかし、たびたび調査地を離れ、所属先の先生方からの確かなアドバイスをもらうことは、とてもぜひたくで有意義な時間であったと思います。ずっと調査地にいると、これを調査したい、あれも知りたい、という衝動のままに動きがちになり、調査計画全体、留学の当初の全体的な見通しを見失いがちです。その衝動をほどよく制御でき、いまおこなっている調査の全体像をそのつど俯瞰できたのは、所属研究機関の先生方のおかげだと思っています。

今回の留学期間では、留学先であるマリでお世話になった人びとに、わたしは一体なにができるだろう、と考える場面も多々ありました。留学助成をいただいての留学だから単なる自己満足で終わらせてはいけない、という気持ちも強かったし、マリの留学期間に出会いお世話になったたくさんの人びととのかかわりから出た思案でもありました。マリに滞在中にお世話になった町の人びとのなかには、「博士課程」「研究」という言葉も知らないけれど、「あなたがわたしたちのことを知りたいのなら」「君がわたしたちのことを日本に伝えてくれるのなら」と、快く調査に協力して下さった方もいました。また、世界的にも「最貧国」と言われるマリの将来のことを、現状への憤りをもって真剣に考えている同年代のマリ人研究者とのかかわりも、わたしのこの留学・研究の意義を再考するよい契機になりました。

今後の現実的な目標は、まず、本留学で得られた情報や研究成果をもとに、ジェンネの多民族の共生の技について、博士論文を執筆することです。それを通じて、直接的に留学でお世話になった方々にお返しはできなくても、ジェンネの社会組織の豊かさ、それを生んだマリの豊かさを、示していけたら、と思っております。